



Title	新出土資料関係文献提要（四）
Author(s)	池田, 光子; 黒田, 秀教
Citation	中国研究集刊. 2004, 35, p. 49-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60798
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新出土資料関係文献提要（四）

池田光子
黒田秀教

本提要は、『中国研究集刊』第三十四号に掲載した「新出土資料関係文献提要」(二)(三)の続編である。前回同様、郭店楚墓竹簡(郭店楚簡)、上海博物館蔵戦国楚竹書(上博楚簡)に関する文献を主対象とした。

『上海博物館蔵 戦国楚竹書 (三)』(馬承源主編 上海古籍出版社、二〇〇三年十二月、縦組繁体字)

上博楚簡の図版(写真版)と积文とを収録した書の第三分冊。本巻には、『周易』・『中弓』・『互先』・『彭祖』の四篇を収録している。「図版」と「积文考察」との二部より成る。

『周易』の积文考察を担当しているのは、濮茅左氏である。五十八簡から成り、篇題は書かれていない。『周易』六十四卦中、三十四卦の内容を含んでいる。その記述方式は、卦画、卦名、卦辞、爻題、爻辞を記し、卦名の直後と爻辞の終わりに赤黒二色を用いた六種の符号を打ち、一卦の内容が終わると簡を改めるといふものである。附録として、竹書『周易』、帛書『周易』、今本『周易』の文字比較表を載せている。

『中(仲)弓』の积文考察を担当しているのは、李朝遠氏である。二十八簡及び附簡一から成り、第十六簡の背面に、「中弓」と篇題が書かれている。破断した簡が多く、断簡を組み合わせて一簡としているものも多い。本篇は、孔子と仲弓との問答(仲弓の問いに対して孔子が答える)を記しており、内容は一部を除き伝世文献には

見られないものである。

『互(恒)先』の釈文考察を担当しているのは、李零氏である。十三簡から成り、第三簡の背面に、「互先」と篇題が書かれている。簡の状態は概ね良好で、断簡は無い。本篇は道家系文献で、「互(恒)先」とは「道」の別名であるとされているが、本文中に「互(恒)先」を「道」と言い換えている箇所がある訳ではない。

『彭祖』の釈文考察を担当しているのは李零氏である。八簡から成り、篇題は書かれていない。本編は、彭祖と伝世文献に見られない耆老なる人物との問答である。

(黒田秀教)

『上海楚簡(容成氏)注釈考証』(出土思想文物与文献研究叢書(十五)、邱德修著、台湾古籍出版有限公司、二〇〇三年十月、七五五頁、縦組繁体字)

上博楚簡『容成氏』に対する釈文と注釈、及び論考。全五章と巻末の参考資料一覽より成る。『容成氏』とは『上海博物館蔵 戦国楚竹書(二)』に収録されている上海楚簡の一篇で、全五十三簡からなる。古代の王者の系譜を

述べた文献で、第五十三簡の背面に「容成氏」と篇題が書かれている。

第一章は「緒論」と題し、新出土資料による学术界の変化を述べ、「楚簡学」の樹立を提言する。

第二章は「容成氏」簡概略」と題し、上博楚簡『容成氏』の竹簡の状態について概述する。

第三章は「容成氏」簡逐字対積分段及句読」と題し、『容成氏』の釈読を行う。全三節から成っており、第一節では、竹簡写真掲げてその横に隸定した文字を示す。第二節では、同じく竹簡写真掲げてその横に隸定した文字を示すが、そこに句読を施している。最後に第三節では、第二節までの作業を踏まえて、『容成氏』の釈文を掲げている。

第四章は「容成氏」簡逐句注釈」と題し、『容成氏』に注釈を施す。一簡を一節とし、全五十三節から成る。第五章は「考証——容成氏」簡之學術価値」と題し、『容成氏』の出土意義についてを論じる。全七節から成る。第二節の『容成氏』に登場する人物を纏めた図表は、その人物が登場する簡も示されており、『容成氏』における人物の関連を把握するのに便利である。

第三章の竹簡写真は大きく鮮明であり、竹簡文字と隸定文字とを比較するのに便利である。『容成氏』の注釈書

は、『容成氏』を収録する『上海博物館蔵 戦国楚竹書(二)』の他には、平成十六年六月時点で、ほとんど見かけない。『容成氏』を研究する上で、本書は欠かせないものである。

(黒田秀教)

『老聃《老子》太史儋《道德経》』(張吉良著、齊魯書社、二〇〇一年九月、三二六頁、横組簡体字)

郭店楚簡の三種の『老子』写本(甲本・乙本・丙本)に対する釈文と注解、及びそれを踏まえた伝本『老子』の注解。唐明邦氏による代序と、第一篇「老聃《老子》注釈」と第二篇「老聃《老子》増訂伝本太史儋《道德経》注釈」、及び「論《道德経》対老聃《老子》思想的完備和發展」と題する跋と、附録である西周、春秋、戦国時代の年表から成る。

代序は「従老聃《老子》到太史儋《道德経》」と題する論考になっており、郭店『老子』の作者を「老聃」とし、そして伝本『老子』は、『史記』に記される三人の「老子」の一人「太史儋」が、老聃『老子』を増訂したものとし

ている。

第一篇は、郭店『老子』を文物本(荊州市博物館編『郭店楚墓竹簡』文物出版社、一九九八年)に従って甲本・乙本・丙本とに分ち、今本『老子』の章立てに従って分段する。そして各段ごとに、先ずその該当部について、今本『老子』の章番号やそこで説かれている内容について解説する。次いで釈文を簡体字で掲げ、注釈を行い、最後に現代中国語訳を行う。

第二篇は、章次は王弼本に従い馬王堆帛書本を参考にして著者が独自に校訂した今本『老子』に、注解を施す。各章ごとに、先ずその章で説かれている内容について解説し、次に釈文を載せて注釈を施す。ただし、郭店『老子』に該当部が存在する章は、時に釈文のみを掲げ、第一篇を参照するよう指示する。

本書の郭店『老子』に対する注釈では、楚文字の認定についてはほとんど触れておらず、また、掲げる釈文も簡体字である。そのため、竹簡の楚文字の確認及び文字の釈定については、別の書を参照する必要があるだろう。

(黒田秀教)

『郭店竹書老子論考』(李若暉著、齊魯書社、二〇〇四年

二月、四〇〇頁、横組繁体字)

郭店楚簡『老子』の校勘に関する研究書。上篇と下篇、結語及び論文三篇を載せた附篇、『老子』異文表と参考文献を載せた附録から成る。上篇は「新校勘論」と題し、第一章から第五章までの全五章より成り、下篇は「異文分析」と題し、第六章から第十二章までの全七章より成る。

上篇は先ず第一章で、郭店『老子』研究の述略を行い、第二章で、王国維の提案した出土資料研究の手法、「二重証拠法」について再考する。そして第三章及び第四章で、郭店『老子』を用いて『老子』の成立経緯を考察し、第五章で小結を述べる。

下篇は先ず第六章で、異文の扱いについて概説し、異文について五つに分類する。そして第七章で、異体字や古今の字形の違いなどの形に関する異文について論じ、第八章で、仮借や同義語などの音・義に関する異文について論じ、第九章で、語義は異なるが思想上は意味を異にしない異文について論じ、第十章で、句形に関する異文を論じ、第十一章で、思想的に意味が異なる異文について論じ、第十二章で小結を述べる。

本書は、郭店『老子』について思想的に研究したもの

ではなく、出土資料を研究する際の校勘について、『老子』を採りあげたという性格が強い。そのため郭店『老子』に限らず、広く出土資料の研究手法を考える時に参考になる。また附録に載せる「老子異文対照表」は、郭店『老子』、馬王堆帛書甲乙本『老子』、『道德真經指帰』、河上公本、『老子想爾注』、王弼本、傅奕本を、方眼のマス一つに一字を入れる形で並べてあり、各種『老子』の伝本ごとの異同を参照するのに便利である。

(黒田秀教)

『郭店楚墓竹簡思想研究』(丁四新著、東方出版社、二〇〇〇年十月、四三二頁、横組簡体字)

郭店楚簡の研究書。本書は著者の博士論文である。竹簡の中でも、著者が重要篇目としている『老子』『太一生水』『五行』『性自命出』『語叢』各篇の研究と、郭店楚簡全体を通しての儒家思想研究とがまとめられている。

全体の論を八章に分け、前半五章は一章ごとに、それぞれ『老子』『太一生水』『五行』『性自命出』『語叢』について論じる。前半五章は、まず、道家系文献として『老子』『太一生水』を扱う。『老子』からは老子原本の思想

と原始儒家との関係を考察し、その際には、馬王堆帛書『老子』と現行本『老子』との比較も行っている。『太一生水』では、その制作時代と作者の推測、宇宙生成論が構築されていく過程を考察している。次に儒家系文献である『五行』『性自命出』『語叢』から、心性の根元となる天命と天道観について論じている。

後半三章は郭店楚簡全体の通論。ここでは、『窮達以時』『成之聞之』『尊徳義』『六徳』『唐虞之道』なども踏まえた上で、儒家の「天命与天道」「人性与人心」「治道与倫理」についてそれぞれ論じている。

重要篇目について詳細に触れてから、竹簡全体を通じたの研究に至る。竹簡をそれぞれ道家系文献・儒家系文献と分けてはいるが、両者とも儒家思想に関連付けて研究を進めている。中でも著者は、「心性」が思想史を考える上で核心になるとし、まず、心性論の根元とする、天命・天道観を探究することから始める。郭店竹簡における儒家思想を研究する際には、目を通しておく必要がある書物と言えよう。

その他、「附録」に著者の博士学位論文に関する審査評定の報告と「参考文献」が挙げられている。「参考文献」は、作者名をアルファベット順にまとめて挙げている。作者名が分かれば、簡易に文献を探し出すことができる

利便性がある。

(池田光子)

『簡帛五行解詁』(劉信芳著、芸文印書館、二〇〇〇年十二月、四〇四頁、横組繁体字)

郭店楚簡『五行』と馬王堆帛書『五行』との研究書。本書の目的は、『五行』の認識論体系を明らかにすることである。研究方法として、釈読の問題と、『五行』の中で、著者が重要とするカテゴリーと用語に対して検討を加えていく。

全体の内容には明確な区分がなされていない。大きく四部に区分できるようにあるので、ここでは便宜上〈注釈〉〈函版〉〈附録〉〈総合研究〉とする。

〈注釈〉では、郭店楚簡『五行』と馬王堆帛書の『五行』とを並べ、注釈を付している。先に竹簡本を挙げ、続いて帛書の経、伝を載せる。章分け(三十三章)と配列とは竹簡に従う。しかし、これでは帛書の元の形が失われてしまうため、別に帛書だけの釈文も〈附録〉の箇所載せている。著者の注釈は降格(各行一字下げること)で、『五行』本文とは区別をつけている。また、各章

の末尾には、注釈とは別に、著者による章の解説を載せる。解説と（総合研究）の箇所にとめられている論とが重なる際には、その点について明記している。

（注釈）のまとめとして、『五行』を「述略」と題した論を載せる。この論では、『五行』を内容面から大きく九つに分けられることと（一）六章、七）十一章、十二）十三章、十四）十五章、十六）二十章、二十一）二十二章、二十三）二十九章、三十）三十一章、三十二）三十三章、『五行』の思想成立時期とについて考察を加えている。

（図版）（白黒写真版）には『五行』の竹簡と帛書とを載せる。帛書は、竹簡の配列に合わせて並べた拡大写真と、章次を変えていない六〇％縮小の原版との二種類を載せる。

（附録）は、帛書『五行』と『德聖』との釈文、帛書と竹簡の章次対照表「帛本行次与簡本章次対照表」を載せる。この表は竹簡と帛書との章次の差異が一目で分かる表である。

（総合研究）では、『五行』の思想研究と文字に関する研究とを九篇載せている。その中に、『六德』の第三〇）三三簡についての注釈が含まれている。この箇所は、著者が『五行』における「義」に関連する重要な箇所と指摘した上で特に取り上げている。

本書の特徴は、やはり竹簡と帛書の『五行』本文を並行して目にすることができる点である。読み手のことを考慮し、対照表と竹簡・帛書の写真とを記載しているのも特徴である。釈読を中心としていることから、『五行』研究の際には目を通すべき書である。また、郭店楚簡・馬王堆帛書の思想面だけでなく、竹簡や帛書における文字研究の際にも参考とすべき書である。

（池田光子）

『出土簡帛叢考』（新出簡帛研究叢書第二輯、李学勤主編、

廖名春著、湖北教育出版社、二〇〇四年二月、二七四頁、横組簡体字）

近年出土した竹簡・帛書についての研究書。上博楚簡と郭店楚簡とが中心となっている。本書は著者が雑誌等に発表した研究が大半を占める。一部、その論文に対しての補足や更に論を發展させた研究も含まれている。

全体を十八章に分け、第一）六章を第一編「上博簡初探」、第七）十三章を第二編「郭店簡芻議」、第十四）十八章を第三編「其他簡帛發微」とする。前述の通り、既

発表論文がほとんどであるため（管見の限り、十八章中十二章）、章同士の内容は接続していない。

第一編では、上博楚簡の中でも『孔子詩論』を中心に論じるが、第六章だけは『魯邦大旱』を対象にしている。『孔子詩論』に関しては、簡の篇次について著者なりの案を挙げる。また、その配列での積文考釈を挙げ、『孔子詩論』に見られる思想的研究にも踏み込んだ章が二章たてられている。

第二編では、郭店楚簡の内、篇名を挙げて論じているのが『太一生水』『五行』『老子』である。論の中心は、郭店竹簡に見られる文字の釈読についての研究である。第十三章では郭店楚簡と馬王堆帛書から『尚書』の中でも晩書とされる二五編についての真偽を論じている。

第三編は、馬王堆帛書・銀雀山漢簡・張家山漢簡から伝世文献までの広い範囲を研究対象としている。五章中三分が馬王堆帛書に関する研究であり、他二章の内一章は本書執筆時点までの出土竹簡を基に『莊子』盜跖篇について研究しており、残り一章は偽作が多いとされる戦国時代の宋玉の作品の真偽を銀雀山漢簡を基に考察している。

本書の特徴は、著者が発表した出土資料関係の論文を一覧できる点にある。また、「前言」において、著者自身

が編と章の解説を数行で述べており、簡易に論の内容を知ることができる。研究内容は、文字の釈読が中心であり、思想研究だけでなく、古代文字を解釈する際にも参考とすべき書である。

（池田光子）